16-Dec. 2012
国立国語研究所 共同研究プロジェクト
シンポジウム「複文構文の意味の研究」

連用修飾節に関する研究の現状と課題

前田直子（学習院大学）

１　連用修飾節の分類

［課題］連用修飾節研究にはどのようなものがあるか。

日本語の連用修飾節（以下、連用節とも）は、形式の多様性という大きな特徴がある。そのため、理論的な研究である統語的・構造的分類に加えて、形態的・形式的分類あるいは意味的分類（記述）が進んでいる。以下、それぞれの研究についてまとめる。

２　連用修飾節の統語的性質　ー　構造的な区分

［課題］連用修飾節の構造的な分類はどのような展開を見せているか。

従属節（連体・連用を共に含む）の構造的な分類は、三尾砂(1942)の「『です体』形に附いた場合の百分率」による接続助詞の順位付け（丁寧化百分率）に始まり、三上章（1953）による単式・複式（＝軟式・硬式）分類と活用形の陳述度の認定を経て、南不二男（1974）による従属節（従属句）のＡ・Ｂ・Ｃ（・Ｄ）の分類が広く知られている。その後、田窪行則(1987)は次のような修正を提案した。

		例
A類１	様態・頻度の副詞＋動詞	て(様態)、ながら（同時動作)、つつ、**ために（目的)**、まま
A類２	頻度の副詞＋**対象主格**＋動詞（＋否定）	**ように（目的)**
B類	制限的修飾句＋**動作主格**＋A＋（否定）＋時制	て(理由、時間)、れば、たら、**から（行動の理由)**、ために(理由)、ので(？)、ように(比況)
C類	非制限的修飾句＋　主題　＋B＋モーダル	**から(判断の根拠)**、ので、が、けれど、し、て(並列)
D類	呼掛け＋C＋終助詞	と(引用)、という

さらに、有田節子（2007：40）は、時制節（B類）を、「不完全時制節」「完全時制節」の２種類に分類し、非時制節（A類）と時制節の中間に位置する副詞節の存在を主張した。

		動作主格の顕在化	一方向の時間関係	双方向の時間関係	例
A類	非時制節	不可能	可能	不可能	ために・ように・ながら・て・まま
B類	不完全時制節	可能	可能	制限がある	ば・たら・ても
	完全時制節	可能	可能	可能	から・ので・のに・なら・のなら

３　連用修飾節の形態論的特徴　ー　多様な接続形式の形態論的分類と個別的な意味記述

［課題］連用修飾節の形態論的・形式的な研究にはどのようなものがあるか。

連用修飾節には、多様な形式があり、その体系化の試みと個別的な意味記述は、これまでも多くの関心を集め、多量の記述的蓄積がある。

前者の「体系化」については、本プロジェクトにおいても、連体・連用を含めた複文（従属節）の体系化に関する発表があった。（以下、下線を付した引用は、本プロジェクトの研究会発表である。http://www.ninjal.ac.jp/research/project/b/complexsentence/complexsentence-pm/）

堀江(2011.2)・坪本(2011.9)では、伝統的な類型論的４分類「関係節・補文・副詞節・並列節（等位節）」と、近年の新たな動き（＝関係節と補文の中間に「主要部介在型関係節」を、等位と従位の中間に「連位(cosubordination)」を位置づける、など）の紹介・検討が行なわれた。日本語研究においても、連体節と連用節の中間に名詞節（補足節）を位置づける立場があり（野田尚史2002、松木2011.12)、益岡隆史(1997)に示されたような伝統的４分類（名詞節・連体節・連用節・並列節）を、連用・連体という観点から組み替え、再体系化しようとする研究が出現している。

一方、後者の「個別的な意味記述」に関しては、現在に至るまで引き続き多種多様な研究が生産されている。本プロジェクトでも、益岡（2011.2, 2012.9）「連用中止形・て形」、長辻(2011.12)「たり」の発表があったが、この分野の明らかな方向性は、コーパスを利用した量的観点からの記述が中心となった点である。丸山（2011.2, 2011.12）、前田（2011.5）、建石（2011.12）、蓮沼(2012.5)などが発表された。さらには、これらのコーパスは「書きことばコーパス」であったが、横森(2011.12)では「話しことば（対話）」のコーパス（映像付き）が分析に使用されていた点は注目に値する。

４　連用修飾節の歴史的変遷と地理的分布（方言）

［課題］現代日本語研究に隣接する研究に、どのような研究があるのか。

３節までに見た研究は、現代日本語を対象とした共時的研究であるが、連用節の研究は、歴史的研究および方言研究においても、多くの蓄積があり、近年、相互交流が多方面で見られている。本プロジェクトにおいても、歴史的研究として高山（2011.12)、福嶋（2012.5)、岩田（2012.9）などの興味深い研究が発表された。例えば、「～うちに」という従属節が取る従属節のテンス・アスペクト形式は、現代日本語と中世末期日本語で次のように異なり、これは中世末期日本語と現代日本語における基本形のテンス的意味、および未来テンス助動詞「う・うず」の発達の違いが関係していることが示された（cf.福嶋2012.5)。

	～テイル	動詞基本形	～テイル：動詞基本形
中世末期日本語	４例	62例	約　１：16
現代日本語	112例	９例	約　12：１

また、方言研究との関わりに関しては、方言文法研究会によって「原因・理由」「条件」「逆接（ケレドモ・ノニ類)」「逆接（テモ類)」の記述が進められている。「全国方言文法データベース」にお

いて現在公開されているのはこのうちの「原因・理由」であり、以下の９地域に見られる次のような諸形式が取り上げられている。

(1) 青森県八戸市：スケ・カラ（ガラ） (2) 山形市：カラ（ガラ） (3) 東京都新宿区：カラ (4) 山梨県奈良田：ドーデ・デ・ニ (5) 岐阜市：デ・ニ (6) 富山市：(α)サカイ・サカイニ・サカライニ・ノッテ・デ・カラ／(β)ガデ・ガ゛ンデ・モンデ・モンダサカイ・モンダサカイニ・モンダノッテ・モンダデ (7) 京都市：サカイニ・サカイ・カラ・ンデ・シ (8) 広島県三次市三和町：ケー (9) 沖縄県那覇市首里：クトゥ・シニチーテー（シンチーテー）・ムンヌ

また、概観として、以下のような諸点が指摘されている（執筆：日高水穂）。

・原因・理由表現の基本的な意味である，事態の原因、行為の理由、判断の根拠），発言・態度の根拠については，どの方言にも，すべてを表し得る汎用の形式がある。
・主節の文タイプによって，制限のある形式が見られる。
　→要求文などの働きかけの強い文では用いられない：(6)β類
　→叙述文などの働きかけの弱い文では用いられない：(5)ニ
・理由を表さない用法では，制限のある形式が見られる。 →(6)β類
・原因・理由節の述語用法では，制限のある形式が見られる。→(1)スケ，(6)サカイ類，(7)ンデ
・推量表現に後接する用法では，制限のある形式が見られる。
　→(1)スケ，(6)サカイ類，(7)サカイニ・サカイ・ンデ
・文末用法では，制限のある形式が見られる。→(5)デ，(6)β類，(9)シニチーテー（シンチーテー）

http://hougen.sakura.ne.jp/

また、下地（2011.12）・米田（2011.12）で発表された、他言語における個別的な記述も、日本語研究に多くの示唆を与えるものであり、この後ともこのような様々な分野における研究との交流が強く望まれる。

５　連体節との交差・主節への移行

連用節は、連体節や主節、あるいは双方と関連することは従来から指摘されてきた(cf.大島報告)。本プロジェクトにおいても、堀江(2011.2)や加藤(2011.12)が理論的・体系的に論じている。一方、松木(2011.12)においては「連用節を構成する名詞派生の複合辞的表現」を網羅的に拾い上げ、連用節の意味的分類に新たな項目を立てる必要性を論じ、記述研究から理論・体系化になし得る大きな貢献を示している。名詞派生の複合辞は連用節だけでなく主節にも出現する。建石(2011.12)「「～たばかり」と「～たところ」の意味・用法の広がり―コーパスを用いた複文研究に向けて―」は、連用節・連体節・主節の三者に関わる形式を記述・分析している。こうした節縦断的な研究は今後も期待される。

６　今後の連用節研究の課題

以上、連用節の研究において注目すべき点を、本プロジェクトの発表を中心に取り上げてきたが、最後に、連用節研究・複文研究における今後の課題について、考えてみたい。

複文の体系化においては、より言語学的な観点での研究が求められる。そのためには他言語の理論的・記述的研究、多言語の対照的研究・類型論的研究から学ぶべきことは多い。

複文従属節の分類については、伝統的な従属節分類には収まりきらないタイプの従属節がある（その代表が主要部内在型関係節である）ことが、本プロジェクトの中でも繰り返し指摘されているが、残された大きな問題の一つに「引用節」の位置づけがある。引用節「～と」は、補足節の一つとする立場と連用節の一つとする立場がある。「と」を格助詞とする立場と、ある形式（例えば断定「たり」）の連用形とする立場がある。これについては、歴史的な研究と共に、共時的な観点での議論が進むことも期待される。

連用節形式の個別的な記述における大きな課題は、**コーパス使用**の問題である。検索技術とコーパスの整備（これには国立国語研究所の多大な貢献がある）が進み、初心者でも簡単にコーパスを使用できるようになり、日本語研究は今後、従来の研究に新たな成果を加えていけるものと考えられるが、一方でコーパスの作成や使用に関わるテクニカルな問題も生じていることを、一般の使用者（研究者）は認識する必要がある。自らが作成・収集したのではないデータを使用することに対しては、十分な注意が必要であることは、連用節研究に限った問題ではないが、形式毎の研究が盛んである連用節研究の分野においては、必ず確認しなければならない点である。

また、コーパス研究におけるもう一つの課題・問題として、日本語の**文体の多様性**をどう扱えばよいのか、ということがある。多くの連用節形式は、文体的な使い分け（話しことばか書きことばか、など）を持つ場合があるが、現代の日本語においては、この文体の類別・認定が難しくなってきており、この分野の研究が求められる。と同時に、逆に連用節形式の研究がそうした研究を助ける面もあることが期待できる。

具体的な個別的形式に関しては、有標形式の記述・研究は進んでいるが、「無標」の形式である連用中止形および「て」形の研究は、汎用形式の難しさもあり、益岡（2011.2, 2012.9）のように今後も引き続き求められる。

連用節研究の応用的研究として、連用節そのものの研究でなく、それ以外の文法カテゴリー（cf. 例えばボイスやアスペクト、前田 2011）や語句（例えば副詞(cf. 蓮沼 2011)、あるいは形式名詞・文末名詞(cf. 松木 2011)）にも利用されると共に、またそれらに対する貢献もなし得ることが期待される。

■引用文献
有田節子(2007)『日本語条件文と時制節性』くろしお出版
田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』第 16 巻第 5 号
野田尚史（2002）「単文・複文とテキスト」『日本語の文法４　複文と談話』岩波書店
益岡隆志(1997)『複文』くろしお出版
三尾砂（1942）『話し言葉の文法（言葉遣篇）』帝国教育会出版部（1995 くろしお出版・復刊）
三上章（1953）『現代語法序説－シンタクスの試み－』刀江書院
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店